

麦の穂乳幼児ホームかがやき 2018年度 事業報告

【職員育成】

- ・毎月の階層別学習会を実施した。また、各グループ会議で「職員研修ファイル」を読みあわせのテキストとして活用し、毎月テーマを決めて養育の理念の振り返りと意見交換を行った。別棟の小規模グループケアではひとり勤務の時間帯は他職員の目の届かない環境があるため、職員の振り返り、記録、小さな出来事でも相談できるグループ体制について取り組んだ。年度末には「新任職員を迎えるにあたって自己チェック」表を用い、養育で大切にしていることを、自分の言葉で豊かに語れることを目指し、自己評価と振り返りを実施した。次年度は新任職員6名を迎えるため、新任育成とそれにあたる現職員の取り組み・振り返りを丁寧に変更していききたい。

【個別対応・生い立ちの振り返り】

- ・担当保育士と共にアルバムを一緒に見て言葉を添えたり、ご家族の面会に合わせて一緒に絵本アルバムを作成し、生まれた時の様子を振り返ったり、「三つの家」のツールを使って子どもの安心・不安・希望を描き、気持ちを丁寧に扱うなど、個別の時間を意識して取り組んだ。また、心理職員によるプレイセラピーのフィードバックを担当職員とともにやり、子どもの心情に寄り添うことを心がけた。施設で育つ子どもたちが自己肯定感をしっかりと持てるような寄り添い、取り組みを大事にしていききたい。
- ・麦の穂学園の学童期の児童を乳児院に招き、一緒にアルバムや小さい頃のビデオを見たり、出生体重と同じ重さの人形を抱っこしてもらったり、部屋を見学し、乳児とふれあいを実施した。麦の穂学園の担当職員にも子どもの幼少期を知ってもらえる機会となった。また、引き続き麦の穂学園の会議に出席させてもらい、措置変更した後の子どもたちの様子についても情報共有ができる体制を作っていきたい。

【小児慢性特定疾患疾病児への対応】

- ・H30.2月に入所した児童（脊髄髄膜瘤他）が体調不良にて入退院を繰り返す事態となった。主治医、児童相談所とはカンファレンスを実施し、導尿を定期的に変更するため、訪問看護を取り入れて対応したが改善が見られず、H31.2月、膀胱皮膚ろうの手術を行った。入院は11回、延べ226日に渡り、この間職員の付き添いを要したため勤務調整を実施し、職員にはかなりの負担を強いることとなった。半面、この児童を受け入れたことで、看護師はじめ職員のモチベーションが上がり、病状への知識や理解を深める機会となった。こうした病気を持った乳児の受け入れ先が確保できず、今後も障害や病気を持った乳幼児の入所が増えるのではないかと懸念される。
- ・理学療法、言語療法のリハビリを開始していく。

【里親支援】

平成30年度は新たに里親支援専門相談員を配置し、支援センターと協力しながら里親支援を展開してきた。圏域での活動は児童相談所と児童家庭支援センター職員と定期的に打ち合わせ、里親会の事務局の動きや里親の家庭訪問など実施している。また、かがやき内のFSWと連携し、里親さんとのマッチングや面会交流をおこなっている。子どもの育ちを丁寧につないでいけるよう関係機関とも連携を深める取り組みを実施していききたい。

【総合防災訓練】

- ・電気・水道・ガスなどライフラインがすべて止まったと想定して総合防災訓練を実施した。また年齢が高い子どもたちと共に避難訓練を実施し、子どもへの意識付けにも努めた。自家発電機の使い方、防災備蓄品を使つての炊出し訓練と試食、備蓄品の入れ替えなど、いつ起こるかわからない自然災害に対して常に安全を確認して非常時に備えていきたい。また次年度はBCP（事業継続計画）の整備を行いたい。
- ・地域消防団に所属する男性保育士が、応急手当指導員講習を経て指導員の認定を受けたことで、職員に応急手当の講習を実施できるようになり、グループ会議日等に合わせて救急救命法の講習を実施することができた。

【地域資源の活用・交流】

- ・発達支援センターつくしんぼ
今年度は年度途中より、2名の児童が週1回通園。子どもの特性をつかんだ支援計画と活動内容がかがやき内でもフィードバックし、発達を促すかわりについて学ぶ機会となっている。
- ・誠和幼稚園交流・どーなつくらぶ
未就園児交流「どーなつくらぶ」に未就園児が計画を立てて参加したことで、子どもも担当職員も、施設外の多くの人たちと交流する機会を持つことができた。また、乳児院の職員が幼稚園の職員や地域の母子と交流を持ち、視野を広げることも意識していきたい。
- ・子育てサロン（乳幼児なんでも相談）
毎月麦の穂会館で開催されている子育てサロンに、かがやきから保育士が親子遊びの時間に参加させてもらう取組みを実施した。次年度はサロンのニーズもふまえ、かがやきの看護師が継続的に参加し、地域の保健師さんや支援センター職員と交流する中で日ごろ乳幼児の養育・看護にあたる専門性を発揮できるよう、学びを深めることから取り組んでいきたい。

【実習指導（保育実習：延べ12校／23名受け入れ）】

- ・実習生へのアンケートを職員へフィードバックし、実習指導を通して自分たちの養育を振り返り、自分の言葉や文章にして伝えていくことを学ぶと共に、養育の質の向上を図る機会として位置付けた。実習が就職につながっている面もあり、今後も将来の職業としての選択肢として施設の魅力を伝えられるような実習指導のあり方を現場職員と共有していきたい。